

Title	東京夏の学校の意義
Author(s)	
Citation	物性研究 (1966), 5(5): 308-309
Issue Date	1966-02-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/85862
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

東京夏の学校の意義

久保亮五(東大理)

去る9月5日から17日までの約2週間にわたって開かれた才1回 Tokyo Summer Institute of Theoretical Physics のために編集者の御好意によつてこの物性研究の貴重な頁を割いて頂きましたので、その報告を申し上げ今後のための記録として残したいと存じます。事務報告および講義内容はそれぞれ分担して書いて下さつたので、私はただひとこと述べるに止めます。

Summer Institute なるものは初めての試みであつたため、必ずしも直ちに一般に理解されなかつたこと、また現在の規則や慣行の枠にはまらない点があることは、重要な困難の理由でありました。その困難にも拘らず、大局的には各方面に相当よく理解され多大の援助を頂き、不十分な点も多いながら、一応の成功を収めたことは、まことに有難いことでしたが、私たち自身に反省すべき点は反省し、また理解をひろめる努力も今後おこたらず、このような試みが成長してゆくたとを望みたいと思つています。

一つの混乱は、Summer Institute といわゆる国際会議とのちがいです。Summer Institute は別名「夏の学校」のとおり、教育的意義が強調されるものと思います。この趣旨については、以前物性研究にも述べましたし、Summer Institute の Opening でも述べたことで繰返したくもありませんが、研究者が起居をともにし、心おきなく話し合い、教え合う互の教育の機会を国際的にもつことが、研究をのばす上にどんなに大きな原動力になるかはいうまでもないでしょう。どんな名前にせよ、そういうものとして私たちはこれを計画したわけですが、固定観念化している国際会議のやり方とちがうところいろいろむづかしい問題があります。一方夏の学校も、学校はこんなもんだ、と固定化しないで、必要に応じてやり方も変え、また改善してゆくべきでしょう。今年はその一つの可能性をさぐり、きつかけをつくつたというだけのことです。

今回の試みについては、正直のところ、思いがけない批判を受けました。これは組織者の至らぬところに由るもので、今後のために有難かつたことでした。

必ずしも、一つ一つの批判に従うことはできませんでしたが、どうか、あまり気短かでなく、少々気長に見ていただきたいと思います。このような試みは不必要であるとか、有害であるとかいうのが皆さんの結論であるならば、私はそれに従いたいと思いますが、だんだんに改めるべきものは改めて成長させよう、ということであれば、私達も今後できるだけ努力はしたいと考えています。

来年以降どうするか、ということは、あまりはつきりした見通しも立ちませんが、幸い、相当熱意をもつて組織に当ろうという方々もありますので、来年も何かできるだろうと思います。皆さんの御援助を心からお願いいたします。

なお、講義の記録は面倒ですが、やはり残したいという希望が強いので、出版の準備を進めています。たぶん明年2月頃にはできる見込です。日本の出版者にやつてもらいたい、と考えていましたところ、幸い裳華房が引受けてくれました。しかし、外国での売りさばきの道がせまいので、その方は Benjamin と提携する交渉をしています。

東京夏の学校の事務報告

高野文彦、宗田敏雄（東京教育大、理）

才1回 Tokyo Summer Institute of Theoretical Physics は才1期（多体問題）が9月6日（月）から10日（金）まで、才2期（場の理論）が9月13日（月）から17日（金）まで、各5日間ずつ、神奈川県大磯海岸にある日本クリスチャン・アカデミー・ハウスで行われた。以下にこれまでの経過と、主に才1期の行事についての報告をする。

この会の開催の話が出たのは、昨年10～11月で、久保、福田の両氏を中心として、他の組織委員（松原、中島、武田、宮沢、南部）とともに招待講師の人選交渉などについて相談が行われて来た。事務局は教育大学の物理学教室におかれることになり、高野、宗田の2人がいろいろな雑用をすることになつ